

私は自分自身を何であると信じるべきか

What Should I Believe Myself to Be ?

寺 本 剛

要 旨

デレク・パーフィットは『理由と人格』においてある思考実験を提示している。そこでは、地球にいる人物の全ての情報をコピーし、その情報に基づいて火星に新たなレプリカを作成した場合、それは地球にいた人物の火星への移動と見なされるべきか、それとも地球にいた人物は死に、火星でその人物そっくりの別人が生きはじめると考えるべきなのか、ということが問題とされている。通常私たちは以上の事態を「私の死」と見なしがちであるが、これに対してパーフィットは火星にレプリカが生まれることは、私が普通に生き続けるのと同じくらいよいことだと主張する。この主張の正否を明らかにするために、小論ではパーフィットの議論を必要な範囲で跡づけ、それに対して批判的に検討を加える。その過程で「私は自分自身が何であると信じた方がよいのか」という問いについて一定の見通しをつけるよう試みる。

キーワード

パーフィット、人格の同一性、遠隔輸送

1. ある思考実験

私は今、地球のある場所に設置された「遠隔輸送機」の中にいる。これを利用するのは初めてで、少し不安だ。気持ちを察したのか、係員は私を安心させようと「遠隔輸送」のシステムについて説明をはじめた。

「手元のボタンを押すと、スキャナーがお客様の細胞のすべての情

報を正確に記録し、同時にお客様の脳と身体とを破壊していきます。その情報は無線で3分後には火星のレプリケーターに送られ、その情報をもとに新しい物質からお客様のものと寸分変わらない脳と身体、言わばお客様のレプリカが作り出されます。安心してください。このレプリカは物理的にも心理的にもお客様そのままです。彼は自分が少し前まで地球にいた人間、すなわちお客様自身であると思っており、お客様がスキャナーのボタンを押した時までの記憶をすべて持っているのですから。」

私はこの説明をきいてますます不安になる。だってそうではないか。ボタンを押してしまったら、私は死ぬ。私が火星に移動するのではなく、ただ私そっくりの別人が私になりかわって生きていくだけなのだ。これはどう考えても詐欺である。係員はこう訴える私を怪訝そうに見て言う。

「もちろん、この輸送手段を利用されるかどうかはお客様の自由です。ですが、すでに多くのお客様がこの輸送機で快適に移動しておられます。皆さんたいへん満足しておられますよ。」

私は愕然とする。みんな騙されて殺されているのだ。満足しているだって？ そんな話は当てにならない。満足しているのは火星に生み出された偽物の方なのだから……。

少なからず脚色を加えてあるが、以上の挿話はデレク・パーフィットが人格の同一性の問題を考察する際に提出した思考実験を筆者なりに再構成したものである（RP, p. 199）。パーフィットはこの後、いくつかの思考実験を駆使して、様々な角度から人格の同一性の問題を考察していく。そし

て、その結論は、驚くべきことに、以上の挿話で私が抱いた不安は杞憂にすぎないというものだ。パーフィットは次のように言っている。

「還元主義的見解によれば、私が継続して存在することが含んでいるのは、物理的・心理的・継続性だけである。非還元主義的見解によれば、それは『さらなる事実』を含んでいる。この『さらなる事実』の存在を信じ、それが前者の継続性に比べて深い事実であって、本当に重要な事実であると信ずるのは自然である。私が『遠隔輸送』の時に自分は火星に行かないのではないかと恐れるとき、私が恐れるのは、異常な原因がこのさらなる事実を生じさせないのではないかということである。私が論じたように、そのような事実は存在しない。私が恐れていることは起きない。決して起きないのである。私は火星にいるこの人物が、未来のいかなる別の人物も私ではないような、特別の密接な仕方で私であることを望むが、私が継続して存在するということは、この深い『さらなる事実』を決して含むことはない。欠けていることを私が恐れているそのことは、いつも欠けている。かりに宇宙船で旅行をしようが、私が信じる傾向のある、その『さらなる事実』は作り出せないのである。」(RP, pp. 279-280)

還元主義の立場をとるパーフィットから見れば、私たち普通の人びとは「自分自身が何であるか」ということについて思い違いをしている。私たちは本当は個々の物理的・心理的状态のつながった状態でしかなく、それに還元可能である。それなのに、私たちは、こうした継続性を超えた「さらなる事実」(代表的なのはデカルト的自我)が存在し、しかもそれが私たち自身の本性であり、守るべき最も重要なものだと思いこんでいるのである。しかし、そのような「さらなる事実」は実は存在せず、「遠隔輸送」

によってそれが失われることもない。だからそれを恐れる必要はない。
パーフィットはこう主張するのである。

果たして私はこのパーフィットの言い分を信じて緑のボタンを押してもよいのか、それとも自分の直観を信じて思いとどまった方がよいのか。決断を下すためには、「自分自身が本当は何であるのか」、あるいは、「自分自身が何であると信じた方がよいのか」という問いについて一定の見通しをつけなければならない。小論で筆者はそれを試みる。以下では、必要な範囲でパーフィットの議論の道筋をたどり、それを批判的に検討した上で、当該の問いに答えるよう試みたい。

2. 思考実験の続き

以上の思考実験は実はこれで終わりではない。パーフィットはさらにこの話の続きに、より進化した「遠隔輸送機」を登場させる。この展開によって問題の核心がより鮮明に示されることとなる。

はじめの思考実験は「単純な遠隔輸送」と呼ばれ、このもう一つの思考実験は「分岐線ケース」と呼ばれる (RP, pp. 200-201)。「分岐線ケース」では、「単純な遠隔輸送」で登場したスキャナーに改良が加えられている。古いスキャナーは私の情報を記録すると同時に、私の脳と身体を破壊したが、新スキャナーは脳と身体を破壊することなく、私の情報を記録し火星に送信することができる。つまり、私はその後もそのまま存在し続け、それと平行して3分後には火星において私のレプリカが存在しはじめることになるのである。ただし、新スキャナーはスキャンする時に心臓を傷つけるため、スキャンを受けた地球上の私は数日中に心不全で死ぬと宣告される。そこで私はレプリカと電話で話をするにすることにする。レプリカは私を慰めようとする。私はレプリカにその後の私の人生を引き継ぐよう依頼する。レプリカは快諾する。彼は私の妻を愛し、一緒に私の子供達の面倒を

見るに違いない。なぜなら、彼は私の記憶や意思をそのまま自分のものとして受け継いでいるからだ。また、彼は私が執筆中の本を完成させるだろう。彼は私の原稿と私の構想もすべて持っており、私と同じくらい立派に仕事を成し遂げるはずだ (RP, pp. 199-200, p. 201)。

このケースを見ると、「単純な遠隔輸送」において私が感じた懸念が杞憂ではなかったと思えてくる。たしかに、レプリカは私そっくりだが、私が私をつねっても、彼は何も感じない。私が死んでも、彼はまだ生きている。「分岐線ケース」はレプリカが私自身ではなく他人であることをまざまざと教えてくれるのである。そしてこのことは、遡って「単純な遠隔輸送」の事例の評価にも影響を与えるだろう。「単純な遠隔輸送」では、緑のボタンを押したあと、私はすぐに意識を失い、その後火星でレプリカが意識を持ち始める。この過程を遠隔輸送と見なす人びとはレプリカが私自身だと思っているのだが、彼らの判断は間違いだった。彼らは騙されているのである。なぜなら、「分岐線ケース」においてレプリカが他人だと見なされるべきならば、「単純な遠隔輸送」の場合にも「レプリカ」はやはり他人と見なされなければならなかったはずだからだ。私が意識を失うのがボタンを押した直後の場合には、火星に生じるのは私自身であり、私が意識を失うのがボタンを押した数日後の場合には、火星に生じるのはレプリカだというのは明らかに不合理だ。「単純な遠隔輸送」でも「分岐線ケース」でもやはり私は死ぬのであり、火星で別の人物が生き始めるのである。

しかし、パーフィットはこの「分岐線ケース」の考察を経たあとで次のように主張する。

「もし私たちが、私のレプリカは私でないと信じるならば、分岐線にある私の将来は通常の死とほとんど同じくらい悪いと想定するのは自

然である。私はこの想定を否定したい。後に論じるように、私はレプリカを持つことを通常の生存とほとんど同じくらいよいとみなすべきである。」(RP, p. 201)

「単純な遠隔輸送」の思考実験にとどまらず、さらに「分岐線ケース」へと移行することで問題の核心がさらに明確になったと言えよう。パーフィットは火星で生み出された人物を私本人ではなくレプリカ（普通は他人とみなされる）と認めた上で、それでもなお、レプリカが存在することが私の通常の生存（私自身が生存すること）と同じくらいよいことだと言う。これは一見したところかなり過激な考え方であり、これに即座に同意できる人はそうはいないのではないか。逆に言えば、私たちが通常持っている自分自身についての理解の誤りを明確に示すためにパーフィットは一見過激に見える主張を展開したと言えるだろう。では、パーフィットのこうした主張の背後にはどのような理屈があるのだろうか¹⁾。

3. 経験の主体としての「私」の継続性

自分自身が何であるかということについてごく一般的な理解を持っている私たちがパーフィットの主張に即座に同意できない理由は、火星で生み出されるレプリカが「私」ではないからだ。この場合「私」とは「経験の主体」のことであり、さらに言えば、この「経験の主体」には他の人間は含まれず、今そこにおいて（つまり「ここ」において）様々な経験がなされ、そこから（つまり「ここ」から）世界が開けているような一人称的な経験の主体としての「この私」だけがこれにあたる²⁾。前節でも指摘したように、たとえ他のすべての点でレプリカが私と同じだったとしても、私はレプリカの経験を経験することはできない。つまり私は「私」であるが、レプリカは少なくともその「私」ではない。そうである以上、レプリカが

存在したとしても、私＝「私」にとってそれは何の意味もない。たとえ多くの苦難が予想されるとしても、私＝「私」は人生を「私」の人生として享受したい。だから、「私」の人生をそのまま他人が引き継いでくれたとしても、つまり、未来の時点において私そのままの心と身体が存在しており、それが私の人生の続きを「生きた」としても、そこにおいて「私」が存在せず、そこで経験されることが「私」の経験とはならない以上、それは私＝「私」にとっては無に等しいのである。

これに対してパーフィットは、このような見解は「私」の存在が継続的でありうるということを暗黙のうちに前提としており、そのことこそが疑われなければならないと主張する。

「私たちは個別的に存在する経験の主体の継続的な存在を意識している、と主張する人たちがいる。(中略) 実際にはそのような意識は、単なる心理的継続性の意識と区別できない。私たちの経験は、そのような実体の存在を信ずべき理由を何一つ与えない。それ以外にそのような理由がないならば、私たちはこの信念を斥けるべきである。」

(RP, p. 224)

火星でレプリカが目覚ますとしよう。その時レプリカは自分が少し前に地球で緑のボタンを押したことを直近の過去として憶えており、またそれ以前に経験し、知ったことも記憶している。そして、だからこそ、レプリカは自分が地球にいたのと同人物であり、地球から火星への「移動」の間にも自分が地球の「私」であり続けたと思っている。しかし、「分岐線ケース」の事例が明示したように、実際にはそうではない。「分岐線ケース」の場合、「私」は地球にいたのであって、レプリカは自分が地球にいた「私」だと誤って信じているに過ぎないのだ。このことからわかる

のは、自分自身が「同一の経験主体」として存在し続けてきたということ
が、少なくとも自分自身の意識の中だけでは証明できないということ、こ
うした意識はただ自分が「これまでこの人物として生きてきた」という記
憶の所有と区別がつかないということである。

ところで、以上の事実は翻って地球にいる「私」にも当てはまる。地球
にいる「私」は自分が「私」であり続けてきたと思っているが、それが本
当にそうであるかはわからない。「私」は、自分自身が経験の主体として
存在し続けてきたということを、今の時点で持っている記憶を頼りにして
信じているだけであって、本当にそうであるかどうかはわからないのであ
る。例えば、「私」は今朝目覚め、自分が昨日と同じ「私」であると暗黙
のうちに確信しながら生きているが、その確信が正しいものであるという
保証はどこにもない。「私」はただ、自分がどの人物であり、またどのよ
うな人物であり、これまでどのように生きてきたかということを「今」憶
えているだけなのであり、それだけでは「私」が昨日の「私」と同じだと
断言することはできないのである。

そして、実はこうした主張は、睡眠のように「意識が途切れる」という
ことが生じていない場合にも想定することができる。パーフィットは次の
ように述べている。

「あなたがこのページを読んでいる時、あなたは突然存在すること
をやめ、あなたの身体はあなたそっくりであるにすぎない何らかの新
しい人物に引き継がれるかもしれない。それが起きても、誰も何の相
違にも気づかないだろう。このことが起きるのかどうか、また起きる
とすればどのくらい頻繁に起きるのかを示す証拠は、公的なものにせ
よ私的なものにせよ、全くない。」(RP, p. 228)

「別の可能性もある。この見解によると、歴史は現実が起こったの

と変わらないが、私がナポレオンでナポレオンが私だったということだけが違っているかもしれない。これはデレク・パーフィットがナポレオンだったかもしれないという主張ではない。それはむしろ、私はあるデカルト的自我であり、ナポレオンも別のデカルト的自我であって、これら二つの自我がそれぞれ別の場所を『占拠』したかもしれない、という主張なのである。」(RP, p. 228)

記憶の連続性から完全に切り離されたデカルト的自我が存在するとしたら、それは一人称的なパースペクティブの純粹形式のようなものとなるだろう。このような形式は、それ自体無内容で、何の特徴も持っていないため、結局それがいつどこで存在しているか、またいつどこで消滅したかわからなくなる。そのため、その継続的同一性を問題にしても意味がない。パーフィットが言いたいのはこのようなことだ。例えば、もし「私」が突然寺本剛からナポレオンになったとしても、気づいた時に「私」はナポレオンの記憶を持って存在しはじめることになる。そのとき「私」は寺本剛の記憶を持っていないのだから、それはただナポレオンがナポレオンとして意識を持ち続けてきたと思っているのと区別がつかないし、実質上区別はない。デカルト的自我を想定したとたんに、それは誰ともつかない純粹形式と化すのであり、そのことは同時にデカルト的自我が私固有のもので無くなることを意味する。そして、そのようなものはいつ無くなっても、またいつ誰の身体へ移動しても、また、一方が他方と入れ替わっても、誰もそれを知ることはできない。刻一刻と持続していく意識の中ですら、ある特定のデカルト的自我が継続的に存在しているかどうかということは、たとえ本人であっても、確認できないのである。

かくしてパーフィットは、継続的に存在している私はデカルト的自我のようなものではないと主張する。

「私たちは、私たちの脳と身体、および様々の相関的な物理的出来事と心理的出来事から離れた、個別的に存在する実体ではない。」

(RP, p. 216)

そして、パーフィットは、デカルト的自我に代わって、過去の経験記憶の所有、過去の意図と現在の行為の結びつき、信念や欲求の持続的所有などから成立する「心理的連結性」とその心理的連結性の連鎖関係である「心理的継続性」によって私の存在が成立していると主張する (RP, p. 216)。この心理的連結性と心理的継続性からなる心のつながりをパーフィットは「R 関係」と呼ぶ (RP, p. 215, 216)。そして、私の連続的存在が R 関係によって成り立っている以上、私が気にかけべきは R 関係だと主張する (RP, p. 217)。これに従うならば、火星において存在しはじめるレプリカは、私が普通に存在し続けるのと同程度の R 関係を地球の私と結んでいるのだから、レプリカの存在は「私」にとって通常の生存と同じくらいよいことになる (RP, p. 201)。逆に言えば、私たちがこれまで通常の生存と呼んできたものは、R 関係の存在という点で、「自分自身の消滅とレプリカの誕生」とほとんど違いがないのだから、もし後者が悪いものなのだとしたら、通常の生存もまた同じくらい悪いということになるだろう (RP, p. 280)。

4. 補足：〈分岐線ケース〉の拡張

パーフィットの見方をさらに確実に理解するために、〈分岐線ケース〉を少し拡張して議論を展開してみよう。〈分岐線ケース〉では地球にいる私は数日後に死ぬことになっていたが、スキャナーがさらに改良され、死ぬ必要が無くなったとしよう。この場合、地球にいる私が存続し続けると同時に、火星では心も体も私そっくりのレプリカが存在しはじめ、その後

も存在し続けることになる³⁾。

では、この場合どちらが本当の私なのだろうか。それとも私は二人になっただろうか。あるいは私はどちらでもなくなったのか⁴⁾。このような疑問を持つ人はまだパーフィットの真意を理解できていないと言える。

まず「どちらが本当の私なのか」という問いを立てる人は、その時点でまだデカルト的自我を私の継続性の基盤として前提としている。そのような人は、どちらが地球にいた「私」と同一の「私」なのか、ということの問題にしているのである。前節で議論した通り、かりに地球で「遠隔輸送機」にいる人物が「私」であったとしても、その「私」がその後どうなったかはわからない。地球にいる人物と身体的に連続しているからといって「私」が連続しているとは限らない。かといって、火星にいるレプリカに「私」が移動したと考えなければならない必然性もない。たまたまそうなったかもしれないが、そうっていないかもしれない。それを見分けることは本人にさえできない。

同様に、デカルト的自我を念頭において「私は二人になったのか」とか「私はどちらでもなくなったのか」と問いかける人がいたとしたら、その問いかけにも答えはない。この一人称的形式が、その後誰のものとなったのか、またならなかったのか、あるいは、分裂してしまったのかといったことは、空虚な問いであり、問題にする意味は無いのだ。

もっとも、パーフィットが主張するように私たちの継続的存在にとって R 関係が本質的なものとしたら、「地球の私」も「火星のレプリカ」も「以前の地球の私」と R 関係を結んでいるのだから、両方とも私だと言えなくはない。むしろ、この場合の私とはデカルト的自我のことではなく、いわば R 関係そのものであるような心的連続性のことである。そのような R 関係が特定の人物をその人物たらしめる条件だとしたら、人格の同一性は原理的には確固としたもので無くなる。一人の人物が未来の複数の

人物と心的関係を持つことが原理的に可能であるならば、それを「ある一人の人物が二人の人物になった」と理解することは許されるだろう。未来に存在することになる二人の人物は自分を「過去に存在した特定の人物と心的に結びついた人物」だと思うだろう。そして最新型の「遠隔輸送機」を利用したことを憶えているならば、この二人は自分と同じ心的出自を持つ人物がもう一人いるということさえ知っているかもしれない。一人の人物であり続けてきた「経験」しか持ち合わせない私たちにはこうしたことは奇妙な事態であり、即座には容認できないかもしれないが、原理的にはこの可能性は排除されていないはずである。

ただし、未来の二人の人物が今地球にいる私と R 関係を結んでいるからといって、以上のように「その二人はどちらも私である」と記述しなければならないわけでもない。「R 関係の存在」を「私の存続」として記述すると決めた場合には、以上の事例は「私の分裂」として理解されるということに過ぎない (RP, pp. 285)。それゆえ、私の存続を決定する基準の取り方によっては、例えば「デカルト的自我の存続」という基準を採用するならば、以上の事例は「どちらも私ではない」と記述することも可能である。だが、これもまた恣意的な決定に過ぎない (RP, pp. 285)。あくまで端的に成立している事実は「R 関係の存在」であり、これを「私の存続」や「私の分裂」として記述しようが、「私の消滅」や「死」として記述しようが、それは重要ではない。本当に重要なのはそれをどう呼ぶかではなく、R 関係が存在しているかどうかである。そして、もしそれが存在しているのだとしたら、かりにそれを「私の死」と記述したとしても、その「死」は私たちが通常考えている死のように悪いものではないのである (RP, pp. 285)。

5. 「私」の密輸入

これまでのパーフィットの主張は大枠以下のようにまとめることができる。

- ① 私たちは通常デカルト的自我が継続的に存在していると信じているが、そのことは「私」本人ですら知ることができない。
- ② 私たちが実際に知ることができるのは R 関係の成立だけである。
- ③ デカルト的自我が未来の時点で存在しなくとも、今の私と未来の時点の誰かが R 関係で結ばれていれば問題はない。
- ④ それを「私の存続」と呼ぶかどうかは好みの問題だが、R 関係が成立していれば、それは通常私たちが「生存」と呼ぶ現象と同程度によいものだと言える。
- ⑤ 逆に、デカルト的自我の存続を信じていた立場から見れば、これまで私たちが「生存」と呼んできた現象は、『私』が消滅しレプリカが存在しはじめる」という現象と同じくらい悪いものであったとも言える。パーフィットの立場から言えば、これこそが私たちの「生存」の現実であり、私たちはこれまで現実とは違ったものを現実と信じ込んでいたに過ぎない。

この説明をきいて、私はそれを許容し、緑のボタンを押すことができるだろうか⁵⁾。以上の説明ではまだ私は緑のボタンを押すのを躊躇するだろう。それは決して私が新しい考え方になじんでおらず、合理的な思考のままに行動することができないからというだけではない⁶⁾。パーフィットの議論にいくつか不審な点があるように思われるからである。

たしかにパーフィットの主張は、はじめは過激に見えるものの、その議

論に伴走していくと、説得的に見えてくる。これまで、私＝「私」は未来に向かって生きており、このままその「私」が存在し続けると思ってきた。しかし、パーフィットが指摘するように、実は今の「私」が次の時点に存在するかどうかは定かではない。それゆえ、私が存在し続けるということを、同一のデカルト的自我の継続としてとらえるべきではない。むしろそれは、未来の時点で誰かある人物が、どんなかたちであれ、今私が持っている心的状態を引き継いでいるということであり、もしこの R 関係が成立しているならば、私はそれ以上のこと、すなわちデカルト的自我の継続を願う必要など無いのである。

しかし、ここでまず一つ引っかかることがある。パーフィットはデカルト的自我ではなく、R 関係こそ私の継続的存在にとって本質的に重要だと説くが、その R 関係にデカルト的自我のような一人称的パースペクティブが密輸入されているように思われるのである。問題の思考実験においてまずパーフィットは「遠隔輸送機」の中にいる私＝「私」の立場に立って、緑のボタンを押すべきかどうかを問題にした。そして、デカルト的自我の継続に対する素朴な信念を否定し、R 関係の重要性を説いた。しかし、そこで R 関係として提示されたのは、レプリカが現在の私＝「私」を未来の時点から「思い出す」「憶えている」という光景であった。ここでは未来が「そこからそれ以前の心的状態への R 関係が成立する『今』」のようなものとして想定されており、同時に、まだ現在においてしか存在しないはずの私＝「私」が未来の時点に存在するかのようには投影されている。すなわち、現在においてしか存在しないはずの私＝「私」が未来の火星のレプリカに暗黙のうちに移入されているのである。

このような密輸入は、私自身の継続的存在におけるデカルト的自我の非重要性和 R 関係の本質的重要性を説得するための潤滑油の役割を果たしていると言えるかもしれない。デカルト的自我の継続性を信じていた私

は、レプリカが一人称的に過去を振り返って現在の私＝「私」と R 関係を成立させているかのような光景を提示されることで、そのレプリカを自分の後継者と認める傾向を強めるだろう。というのも、そこには私が素朴に求めている一人称的パースペクティブが存続しているように思えるからである。この光景はまさに私が「今」持っている光景と類似したものであるように思えるため、そのような光景を未来の時点で可能にするかに見える R 関係は非還元主義者にもなじみやすいものに映ることになる。そしてこのことは本当は他人であるレプリカを私自身と見なす傾向を不当に私にもたらしように思われるのである。

もっとも、このような批判は少し的外れであるかもしれない。というのも、パーフィットは継続的な実体としてのデカルト的自我を否定したのであって、そのつど生じてくる一人称的パースペクティブを一概に否定したわけではないと思われるからである。私たちがデカルト的自我というコンセプトに何がしかの説得力を感じるのは、そこにおいて私たちの生の本質である一人称的パースペクティブが含意されているからではないか。好意的に解釈すれば、パーフィットはデカルト的自我というコンセプトに含まれるこの重要な要素を確保するために、一般的にデカルト的自我というコンセプトにまわりついている「永遠に続く同一性」とか「実体」というイメージを取りのぞこうとしたのかもしれない。そうだとすれば、パーフィットが提示する R 関係に一人称的なパースペクティブの性質がはじめから組み込まれているのは、むしろ当然のことだと言えるだろう。

ただ、私が引っかかっているのは以上の点だけではない。少し別の角度からもパーフィットの議論に批判を加えてみよう。

6. R 関係の取り違い

パーフィットの議論に残るもう一つの不審な点は、パーフィットがその

議論のなかで未来の時点での R 関係の成立を自明のごとく前提しているように見えることである。私がパーフィットの議論に説得されたとしよう。その場合、もし現在の私と未来のある人物との間に R 関係が成立することが確実であるならば、私は安心して緑のボタンを押すだろう。しかし本当にこの R 関係が成立すると期待してよいのだろうか。

なるほど、現在から過去への R 関係の成立は自明かもしれない。私 = 「私」は現在様々なかたちで過去の私自身と心的に結びついて存在している。私 = 「私」は昨日自分が誰であったのか、何をしたのか、また昨日の時点で自分が今日何をしたい思っていたのかといった様々なことがらを憶えている。このように、程度や種類の差こそあれ、私 = 「私」は様々な経験や思考をほかの誰でもなく私自身のものとして憶えており、そのことを通じて私の継続的存在を確信している。逆に言えば、私 = 「私」が現在において自分を特定の人物として理解できている時点ですでに、その前提条件として記憶が成立し、機能しているとも言える。すなわち、そこに R 関係が成立していると言えるのである。

しかし、未来に関してはどうかだろうか。たしかに私 = 「私」は現時点で自分自身の存在について予期や期待、意思などをはたらかせているかもしれない。しかし、これほど頼りないものはないだろう。それらはあくまでも未来の時点で思い出されたり、実現されたり、行動に移されたりした場合にはじめて本当の意味で未来との結びつきを獲得する。つまり、未来のある時点が現在となった時にはじめて、以前現在だった時の予期や期待や意思は、今や現在となった未来の時点から「思い出される」「憶えている」というかたちで、未来（その時には現在）と結びつくのだ。

明記しなければならないのは、R 関係とはこのようにそのつどの現在から過去向きに成立するものであり、未来へ向かって成立するものではないということである。私は自分が誰であったのかを少なくとも記憶を通じて

直接確信することができるが、未来にはそのような直接的なアクセス方法はない。未来に存在する人は、もしそのようなものが存在すると想定できたとしても、いわば他人なのであって、その他人が私を自分として思い出してくれなければ、その他人は私とはなりえないのである。別の言い方をすれば、現在の時点ではまだ未来は空虚、より強い言葉を使うならば無であり、たとえ予期などの心的状態を所有していても、それだけではまだ私は未来と R 関係を結んでいるとは言えない。あくまでも未来が現在となり、そこからだれかが振り返ることによってしか R 関係は成立しないのである。

ところが、このような R 関係の本質的構造に反して、問題の思考実験においてパーフィットはいとも簡単に未来を先取りしているように見える。例えば、未来の時点で地球にいる私自身であれ、火星にいるレプリカであれ、彼らは地球にいる今の私＝「私」と R 関係で結ばれた存在者として登場する。しかし、このことは前提とされるべきことではないはずだ。今の私＝「私」は、誰かが私の今の思考や意思を未来の時点で思い出し、それに基づいて行動することを願っているが、それはあくまでも予期や期待であって、それだけではまだ未来の誰かとの R 関係が成立しているわけではない。そして私＝「私」にできるのはあくまでこのような予期や期待までである。未来の時点で今の私＝「私」の予期や期待を誰かが引き受けることを今の私＝「私」は原理的に保証することはできない。そのような確信を持ったとしても、それは今の私＝「私」の視点を未来に投影しただけのものであって、それはやはり予期や期待以上のものではない。ところが、パーフィットはこうした予期や期待を超えて、あたかも未来の時点でこうした予期や期待が成就されることを前提にしているように見える。

R 関係の本質的構造からの逸脱は例えばパーフィットの次のような言い

方にも表れている。

「私は明日と40年後の両方に一日だけ苦痛の日を持つことになっているとしてみよう。今の私は明日の私自身と強く心理的に連結している。今の私と40年後の私との間にはずっと小さな連結性しかない。連結性は私の将来を配慮すべき私の二つの理由のうちの一つだから、連結性がずっと小さくなったときに私の配慮が小さくなるのは不合理ではありえない。」(RP, pp. 314-315, cf. p. 313)

ここでパーフィットは今から見て近い未来と遠い未来とでは R 関係の一端を担う心理的連結性の強さが異なると言っており、だからこそ連結性の弱い遠い未来の自分に配慮すべき度合いが小さくなると述べている。気にかかるのは、パーフィットが現在から未来に向かって弱まっていく R 関係のグラデーションの存在を手放して前提していることである。確かに現時点において私 = 「私」が「時間的に過去へ遠ざかるにつれて記憶が薄れていく」と主張することはできるだろう。私は自分の記憶の有り様を直接的に知り、描写することができるのだから。しかし、未来に関してはそうはいかない。すでに述べたように未来は無であり、R 関係は未来に向かって成立するものではない。また、もしそれが可能だとパーフィットが主張したとしても、それはせいぜいのところ「過去が遠くなるにつれて記憶が薄れていく」という現象を方向的に反転させ、投影しただけのものでしかないだろう。だとしたらそれは単なる予期や期待でしかなく、やはり本当の意味での R 関係ではないはずだ。しかしパーフィットは、まるで未来に R 関係が続いていくかのごとく、「未来に向かって R 関係が弱まっていく」と語ってしまう。パーフィットはどこかで R 関係の構造を取り違えてしまっており、そのせいでこうした語り方をしているのだ

はないだろうか。

7. 私は自分自身を何であると信じるべきか

以上の議論から「私は自分自身を何であると信じるべきか」ということについて一定の見通しが得られたように思われる。私は自分自身を「永続的に同一の実体」であるデカルト的自我とみなすべきではない。パーフィットが論証するように、そのようなものの継続的存在は本人ですら確認できないからだ。そうではなく、私は自分自身を R 関係としてとらえるべきである。ただし、パーフィットが行った R 関係の内実の取り違えは避けなければならない。すなわち、私は R 関係を以下のように厳密に理解するべきである。

- ① R 関係とは本質的に現在の私＝「私」から過去を「思い出す」「憶えている」というかたちで成立する心的な結びつきであり、本質的に一人称的なパースペクティブから記述されるような関係である。
- ② R 関係は未来に向かっては成立せず、また未来から現在を振り返る R 関係の存在を現時点から保証することはできない。未来の人物は、明らかにそのようなものが想定できるとしたら、本質的にみな他人であり、そうである以上、その他人が今の私＝「私」を自分として「思い出す」「憶えている」ことを先取りすることはできない。

注意すべきは、R 関係を同じ権限をもつ無数の主体が鎖のように横につながっていく連鎖関係としてとらえられるべきではないということだ。この図式に従って理解しようとする以上二つの本質的な点が忘れ去られてしまう。誤解を恐れずに図式化するならば、むしろ R 関係は入れ子の形態によって理解した方がよい。現在の時点に最も大きい入れ物（主体）

があり、そこにより小さな入れ物が入り、そのより小さな入れ物の中にさらに小さい入れ物が入り……といった具合に過去へと遡っていく、あるいは逆に、そのつどの時点の入れ物がそれ以前の入れ物を包摂し、その事態が連なってこの「今」においてその連なりは止まる。そしてその先に同様の構造を想定することはできない。その先は完全に無だと思えるべきなのである。

8. 結び—私は緑のボタンを押すべきか

では、私が自分自身を以上のような R 関係だと信じるべきだとしたら、結局私は緑のボタンを押すべきなのだろうか。まず言っておかなければならないのは、この件に関するパーフィットの説明は不十分であり、それだけではまだ緑のボタンを安心して押すことはできないということである。たしかに、パーフィットの言う通り、私は自分自身をデカルト的自我ではなく、R 関係であると信じるべきだろう。この点には同意する。しかしその思考実験においてパーフィットは、レプリカを今の私と R 関係で結ばれた存在者として登場させ、あたかも未来の時点で私の心が引き継がれることが確実であるかのような期待をもたらしした。そして、緑のボタンを押しても大丈夫だと私の背中を押す。しかし、R 関係の本質的構造からして、本当は未来の時点における R 関係の成立を今の時点で保証することはできない。レプリカが誕生するからといって、そこにおいて現在の私に対する R 関係が成立するとは限らないのだ。このような点について、パーフィットの説明には未来における R 関係の成立を誇張する傾向があり、誤解を招くものとなっている。自分自身の存続を願う私は、こうした不確かな情報で満足し、安心することはできない。この状態ではまだ緑のボタンを押すことはできない。

しかし、実は、緑のボタンを押さなかったからといって安心できるわけ

ではない。もし私が私自身を真の意味で R 関係として理解するべきならば、私にとって未来は完全に無であり、そうである以上、レプリカばかりでなく地球に居続けた未来の私においても R 関係の成立は保証されないからだ。地球に居続けたからといって今までの経験がまったく忘却されてしまう危機的状况を避けることはできないのである。

そうだとすると、私はいずれにせよ絶えず存亡の危機におかれていることになる。そして、実はこのような危機的状况が常態であることを大前提の認識として受け入れたあとで、ようやく私はパーフィットの議論が納得できるようなる。すなわち、一寸先は闇であり、どのようなかたちであれ次の時点で R 関係が成立するかどうかかわからないという状況の中で、それでも未来において R 関係が成立してほしいと期待する場合に、私は緑のボタンを押しても大丈夫なのか、というのがパーフィットの問題にしていることだったと理解できるのである。この場合、私は地球に居続けることとレプリケーターを使うことが同程度の確率で R 関係の成立を可能にすると判断できる十分な根拠が得られたならば、この二つの在り方は自らの存続を願う私にとっては等価であり、緑のボタンを押しても大丈夫だと答えることができるだろう。特に「単純な遠隔輸送」の場合には、その方が早く目的地に移動できるのだから、その方が便利である。そのような理由で緑のボタンを押すことは合理的だということになるかもしれない。

もっとも、すでに触れたように R 関係の中に一人称的パースペクティブの特性が本質的なものとして組み込まれているとするならば、「未来の時点で R 関係が成立する確率」を問題にすることができるかどうか甚だ疑問である。なぜなら、だれも自分とは別の一人称的パースペクティブの存在を確認できないとすれば、そのような本質を持つ R 関係が成立しているかどうか、また成立する見込みがあるのかどうかを知ることなどできないように思われるからである。もしこのことがわからない場合、結果の

予想や期待がまったくできないのだから、ボタンを押すべきかどうかは皆目見当がつかないと言うべきであろう。

その一方で、「分岐線ケース」のような場合は、今＝「今」の私＝「私」と未来の私と思われる人物とが直接交信することによって、その人物がどれほど私＝「私」と結びついているか、その人物において私への R 関係が成立しているかということが、言語を介して「近似的」に確認できる新しい可能性だと言えるかもしれない。もしこの見方が正しいならば、そのまま地球に居続けるよりも、分岐線ケースのようなかたちで「未来の自分候補」との交信の機会を持つ方が、私自身の存続を強く願う私には合理的な選択だということになるだろう。その場合、私は積極的に緑のボタンを押すべきだということになるかもしれない。

* 主要参考文献である Parfit, Derek : *REASONS AND PERSONS*, Oxford University Press, 1984からの引用箇所ならびに参照箇所を示す際には RP の略号を使用し、その後に頁数を付す。なお、引用に際しては邦訳を参考にさせていただいたが、地の文との兼ね合い等により表現などを変更した部分がある。

注

- 1) パーフィットは自らの主張を根拠づけるために、様々な反論を想定しながら、それに答えていくかたちで議論を重ねていく。その過程ではいくつかの思考実験が念入りに展開される。これらの議論を全て紹介し、批評を加えていくことは紙幅の関係上困難であるし、また本稿の目的にとっては不必要でもある。パーフィットの基本的な発想はそれほど複雑なものではないと筆者は考えており、本稿では、筆者が本質的と考える議論のみを選択的に扱いながら、なるべくシンプルにパーフィットの考え方を示すことを試みたい。
- 2) もちろんこの場合、一人称的という言葉をつけ加えたからといって、実はほとんど何の説明にもなっていないことを筆者は自覚している。「私」の説明に「一人称的」という言葉を使うのは、明らかに同語反復である。だが、他の経験主体が存在するか否かにかかわらず、他でもないこの経験を経験している主体を言い表そうとすると、必然的に言葉が失われてしまう。ここで

は読者に筆者の意図が理解されたことを前提として議論をすすめることにしたい。

- 3) パーフィット自身は類似の問題を「私の分裂」という思考実験によって考察している (RP, CHAP. 12, 89)。本稿では「遠隔輸送」の思考実験を主要なサンプルとして扱うため、それとの連続性を優先して、同じ問題を「遠隔輸送」の思考実験の延長線上で考察する。
- 4) パーフィットは類似の思考実験において、可能性が4つあると指摘している。すなわち、(1)私が生き続けていない、(2)私は二人のうち片方として生き続けている、(3)私は二人のうちもう片方として生き続けている、(4)わたしは両方として生き続けている、という4つの可能性である。
- 5) この場合、「遠隔輸送機」の技術的な信頼性が私に必要以上の不安を与えているわけではない。具体的にここでは、宇宙船が事故に遭うのと同程度の確率で、レプリカが適切に形成されないことがあるといったことが前提とされているとしよう。
- 6) パーフィットは、一方で、デカルト的自我の存続という見方を信じ続ける傾向が私たちには残り (RP, p. 279)、還元主義的な結論を平静に確信することは難しいと言う (RP, p. 280)。しかし他方で、還元主義的見解は知性的あるいは反省的なレベルでは信じられるものであり、私たちに残り続けると思われる還元主義への疑念や不安は不合理なものであるとも言う。